Plant Resources が中心となった調査・開発・人材育成などに対する援助・協力が要望されている．差し当たりの資源開発の目標として挙げられている薬物を見ると *Nardostachys*, *Valeriana*, *Ephedra* で昔ながらの感じがし，こういう分野でも新しいものを見つけるのはなかなかむづかしいのだな，と思う．入手希望者はヒマラヤ地域天然薬物資源研究会（194–8543 町田市東玉川学園 3–3165 昭和薬科大学植物園 Tel. 042–721–1585）へ．

（金井弘夫）

□Pearce N.R. and Cribb P.J.: **The Orchids of Bhutan** 643 pp. 2002. ¥17,690. Royal Botanic Garden Edinburgh.

Flora of Bhutan の Vol. 3, Part 3 に当たるが，B5 版と既刊のものよりはサイズがずっと大きく，その理由が序文に記されている．ラン科はこの地域最大の種数を持ち，これ迄の本のサイズでは入りきらないこと，本書がこのシリーズの掉尾をなすものであることなどから，大型にして分布範囲の記述を国外まで拡げ，学名の引用をよりくわしくし，タイプや参照標本をすべて記すなど，既刊のものより内容を拡張した．とくに隣接のシッキムの標本は丹念に引用されている．参照した標本のリストが巻末18頁にわたって示され，東大の採集標本も含まれている．これによって本書はブータンのみならず，ネパールやインドや中国のラン研究に，より有用さを加えることとなった．138枚の線画と32頁のカラー写真を含む．全部で579種が記録されているが，内17 % は一点しか記録されておらず，2–3 点しか標本がないものまで含めると50 % に近い．したがって本書がブータンのランの総まとめというものではなく，研究の余地は大いにあることが強調されている．（金井弘夫）

□Rajbhandari K.R. and Bahttarai S.: **Beautiful Orchids of Nepal** 220 pp. 2001. Rs. 1,200. Private Publication.

ネパール産ラン科植物101種を，カラー写真を左頁に，解説を右頁に配してある．カラー写真はすべて一頁大で，拡大し過ぎの感じのものもあるが，カトマンズで印刷されたものとしては，こう言っては失礼だが上出来で，その出来ばえは原画の質にかかっていると言ってよい．書名からわかるように，目につく種類を対象にしているので，これから先は植物学的な図譜を目指してほしいものだ．そのとき大事なのはスケッチだが，ネパールの植物図はどうも立体感にとぼしいうらみがある．研究者が自分で描くにせよ画工に描かせるにせよ，この点を意識することが必要だろう．入手についての著者の連絡先は Department of Plant Resources, Thapathali, Kathmandu である．（金井弘夫）

□清水建美，木原　均（写真）：**高山に咲く花** 495 pp. 2002. ¥3,000. 山と渓谷社．

高山帯の植物をその場で調べることができるよう，ハンディサイズになっている．属ごとにその花式が掲げられ，その読み方が巻頭に説明されているが，これはどこ迄理解されるだろうか．私などは花式図の方が具体的で分かりやすいと思うのだが，具体的なだけに一つの図で代表できないという問題がある．また染色体数もわかっているものは種類ごとに記されている．葉緑体 DNA の研究による分子系統地理学についても，分類学へのこの手法の導入についての著者の取り組みが解説されている．著者が一般向けの図鑑から，さらに高度な内容をもつものにしようとする意図が察せられる．（金井弘夫）

□森　和男：**雲南の植物** 239 pp. 2002. ¥10,000. トンボ出版．

植物自由業を自称する著者は，最近では専ら中国の四川，雲南を駆け回って観察や撮影を続けている．本書はその蓄積の一部を披露したもので，1,000点を超える美しいカラー写真で埋められている．写真の出来ばえについては，あらためて言うまでもあるまい．この地域は国の観光政策もあって，外国人への開放が進んでおり，道路網も発達していて，車を使えば高山草原へ直接乗り入れることも可能だそうだ．もっとも，二度と通りたくないというような道も少なくないらしいが…その一方，山草の商品価値に目覚めた人々によって，目ぼしい花々が忽ち姿を消すということ

もあるようだ．「ほとんどが道端で撮ったものだ」というが，調査研究をいくらやったとしても，これだけの花を目にすることはできないのだから，著者の健在を祈って次の一冊も期待する．（金井弘夫）

□伊藤ふくお（北川尚史，監）：**どんぐりの図鑑** 79 pp．2001．￥2,800．とんぼ出版．

著者は昆虫写真家．ゾウムシの食餌となるドングリについて，一粒からでも同定できるように，その各部を詳細に写真に収めたとのこと．だから説明も，ドングリについてだけ書いてある．その上で，実生，花，葉，冬芽，木肌を取り込んで見開き2頁に一種を納め，*Quercus, Lithocarpus, Castanopsis, Castanea, Fagus* と，日本産22種が同じ形式で示されている．すべての種類を同じ形式で見られることは，見る方から言えば大変ありがたいことだが，作る方にすれば大変な苦労があったに違いない．巻末にはドングリばかりすべて比較できるように，前の図鑑の部分とは異なるアップの影像が並び，その上冬芽と落ち葉の比較影像も続いている．この本は好評だったようで，初版が12月なのに，翌年の3月には第3刷が発行されている．総合的な植物図鑑は山ほど刊行されているが，そろそろこういうモノグラフ的な図鑑（たとえばモミジ）が作られてもよい時期に来ているのではないだろうか．（金井弘夫）

□酒井聡樹：**植物のかたち**．258 pp．2002．￥2,300．京都大学学術出版会．

植物の形の数理モデルを，進化的意義にからめて研究している著者が．研究者としての自己が形成されてゆく過程を物語っている．序文にあるように，研究の学問的解説をしようというのではない．大学院への入学から，研究テーマの模索，修士論文，研究誌への投稿，博士論文と時間を追って，周囲の仲間の批判をうけながら成長して行くあり様が記されるのだが，その書きぶりがなんだか楽しそうで，つい読まされてしまう．あちこちに数式が出てくるが，これは読み飛ばしても筋を追うのに差し支えないし，律儀に理解しようとすれば，もちろん勉強になる．かつて故井上　浩氏が，若くして「コケに魅せられて」という本を出版し，これが後のコケ学徒のさそいこみに大きな影響があったことを思い出す．著者の研究テーマとは関係なく，「何かをしたい」と思っている学生さんにすすめたい．（金井弘夫）

□広松由希子（文），大森雄治，ヴイジュアルフォークロア（写真）：**せいたかだいおうーヒマラヤのふしぎなはな** 28 pp．2002．￥410．

福音館書店月刊かがくのとも8号（通刊401号）と奥付にあり，子供むけの「はじめてであう科学絵本」のシリーズである．*Rheum nobile* の迫力あるカラー写真，その芽生えから次第に大きくなって花が咲いて枯れるまでを，言葉少なく物語っている．かわった形の古生物や動物の写真は見飽きるほど出回っているが，植物のはなかなか無い。あったとしても「きれいな花，珍しい花」としてしか提示されず、本書のように生活史をふまえた見せ方はどうもしてもらえない．ヒマラヤでの植物調査の成果が，こうして子供むけにまで披露されるのは歓迎される．日本の植物でも，こういう見せ方をする余地が，まだ大いに残っているだろうと思う．（金井弘夫）

□小川　潔，倉本　宣：**タンポポとカワラノギク** 146+7 pp．2001．￥1,900．岩波書店．

環境保全や自然保護問題でよく話題にあがるこの二種を永らく研究している著者らが，第一部，第二部でそれぞれの種類の研究の経過と展望を語る．第三部は林　良博，武内和彦両氏をまじえた討論で，市民運動を含めた環境問題との取り組みが議論されている．保全生物学の一面を知るのによい読み物である．ただ一つ引っかかったのは，先年行われた環境庁の「身近な生き物調査」の結果は「きちんとした統計処理をすれば，誤った情報を排除できるとの確証を得た」ので「このデータは使える」と結論されていることで，「エッ？」と思ってしまった．あのデータはそういう検討の対象にされたのだろうか？（金井弘夫）